

風土



露のこゑ

神蔵器

草刈つて石投げて盆来たりけり
夏帽子買つて妻へは香を買ふ
生きる日も死ぬ日も一畳藺莫塵かな
一日の一刻揚羽来しことも
金槐集ひらけば梅雨の明けてをり

飯島晴子冥土に水を打ちぬるか
メロンすくふ一語一語を噛むごとく
紙魚走る村にから傘連判状
母のこゑ聞かむと出れば露のこゑ
をととひのきのふのけふの雲の峰
迎へ火と送り火の間旅発てり
レクイエム四重唱や合歓の咲く

七月十四日奥田弦良氏逝去



竹間集

同人作品



身 辺 抄 浜 明 史

雀らにこゑあり梅雨の中休み
源流や七月七日の笹さわぐ
仮橋に鮎の川筋分れけり
犬猫に美醜のありて虎が雨
上場の株の落差や店頭虫
またたびの花挿して壺立ち上る
恙なき余生や胡瓜の雌花反る

鵜の瀬 浜 福恵

岬端へ伸びる葉桜並木かな
灯台へ架かる橋あり大^{たい}唐^と米^{こめ}
四十雀の声に向かひて汗拭ふ
舟虫に長幼の序や隠れ岩
三代^{天徳寺にかな女・秋子・紗一の句碑あり}の句碑一山に蟬時雨
草の根を鯉が突つける暑さかな
麦藁帽の師を幻の鵜の瀬かな

短 夜 蓮尾あきら

郭公や一つ出てゆく貸ボート
瀬の音をたのみに蟹の渡りをり
阿蘇過ぎて水の匂ひの夏木立
短夜の旅寝にあれば由布ヶ岳
小魚に浮葉がたより群るるなり
夏めくや暮れ方近き寝台車
空梅雨の空に鳶^{とんび}のさしむかひ

産 土

— 関根 洋子 —

七 月 の 水 を 洗 ひ て 芋 車
要 害 の 四 方 に 挿 し た る 今 年 竹
竹 落 葉 温 し 氏 神 詣 か な
滴 り の 刻 ふ く ら み て 来 り け り
天 使 よ り 翅 を も ら ひ て 蜻 蛉 生 る
跳 べ さ う で 跳 べ ぬ 畦 川 花 う ば ら
巡 見 使 の や う に 青 田 の つ ば く ら め
夕 立 の 前 触 れ だ け と な り に け り
胸 中 の 白 く な る ま で 草 を 引 く
眉 ほ どの 夏 の 月 と は な り に け り

部落の風習

産土の流れ涼しき暗渠かな
曲りたる山河の味の茄子・胡瓜
夕焼の色に煮つめて酸塊ジャム
桑の実を食べ口中の日暮けり
一碗は犬のためなる冷汁
明易や扶養一匹・四十九羽
初ぼたるきのふの闇の入れ替はる
ゆすらうめ耳順すぎても同級生
ここ三日素直に生きて金銀花
雷いかずちの産地の端に暮しをり

山河集

同人作品



神蔵
器選

紫陽花や休みてながき登り窯
生家の墓^{ひま}行方不明となりにけり
地下街に熱帯魚生き誰も見ず
夕立の端に飯島晴子かな
紙魚の書や「ローマ帝国興亡史」

和田あきを

千年の樗一樹の青あらし
雫してあをき匂ひの茅の輪かな
清滝に亡き父の宿河鹿鳴く
天ぷらを大皿に盛り雲の峰

浅田光代

太行繩文考古館

「縄文のビーナス」に逢ふ麦の秋

篠の子を雲の中より採り来たる
子燕のこゑの沸きたつ巢立かな

工藤ミネ子

群雲の深きより出づ梅雨満月
急かす水ゆるやかな水田植終ふ
長子みな家を離るる笹の花

高橋花仙

羽抜け鶏空飛ぶ夢を捨てられず
青葉風地蔵を洗ふ列につく
公園に子の声もどる梅雨晴間
梅雨晴間太つた犬とすれ違ふ
鍵多き暮し青梅ころげ落つ

小林和子

山開き見えなくなりし山の形^{なみ}
うどん玉踏んで寝かせて祭来る
石楠花の抱きしづめる氷室口
桐生窯に炎^ひのとき在りて蚩かな
ふるさとは母系に絶えし合歡の花

◇特別作品◇(抄)

鎌倉

下山田美江

揚羽現れ巡礼古道入り行けり
手作りの標に鳴くや時鳥
夏闇の金剛窟に菩薩かな
夏草の水玉ちらし下りけり
供へらるかたばみ紅き石仏
あぢさゐの巡礼道となりけり
五輪塔より十葉の燈下り
梅雨湿る石切り跡の窟かな

風土独語／神蔵 器



夕立の端に飯島晴子かな

和田あき

飯島晴子の第六句集『儂々^{ぼんぼん}』の平成四年の作に、
さつきから夕立の端にあるらしき 晴子

では、ある年齢に達した女性が、夕立はもう行つてしまったのか
しらと思ひながら、自分もまた夕立と一緒に、この世を抜け出し
ていつてしまったような浮遊感覚を味わつています。年齢を重ね
て初めて訪れる不思議な感覚です」と鑑賞されていた。

「夕立雲の端」を通らないで、言葉の「夕立の端」へたどりつ
くことは出来ないが、夕立雲を想定できるだけの現実の空の広さ
を得て、まさしく現実を超越した飯島晴子が立っている。

あきをさんの句は飯島晴子の句をふまえて、彼は彼の夕立の端
に立っている飯島晴子を見ている。

羽抜け鶏空飛ぶ夢を捨てられず

高橋 花仙

羽抜けした鶏の姿は何ともみすばらしく、哀れで悲惨ですらあ

る。しかしこれは生理的現象で病気ではないので「羽抜鶏卵を産
んでしまひけり 稚魚」ということもある。

鶏の祖先はダーウインの単元説とデゲットマイアの多元説が
あるが、どちらの系統も鶏が大空を飛んでいたという記録はない
ようである。全く空を飛ぶことの出来ない人間も飛行船や飛行機
を発明してしまつた。もともと羽を持つ鶏が空飛ぶ夢を持ち続け
ているとしても不思議ではない。そのうち鶏もいつか大空を自由
に飛べる日が来るかも知れない。

うどん玉踏んで寝かせて祭来る 小林 和子

私の子供の頃、祭や不祝儀、それに客人があつたりするとよく
うどんを打つたものである。これといった食べ物もない田舎では、
うどんは何よりもてなしであつた。

小麦粉を塩水を加えてよく練り大きな玉を作り、藺草の間に
はさんで踏む。子供の体重が、丁度よいと私もよく踏まされた。
そのあと固く絞つたぬれ布巾をかけて寝かせた。うどん作りはこ
こからが大変なのだが、私の家には手廻しの混合機（延機と切出
し機が複合したもの）があつたのでわりと簡単に出来た。

作者の家でも現在はまだもう自宅でうどんを打つことは無いであろ
う。しかし祭が来れば、きまつてうどんを打つていた子供の頃が
なつかしく思い出されるのではなからうか。（以下略）

風土集



神蔵 器選

一礼は母のさよなら南風吹く 高槻 浅田 光代

夏帽子足裏の砂を波がひく

青梅雨の森や魚となりてをり

太宰忌や川面に増ゆる雨の粒

水が水しづかに押して半夏生

夏蝶の天の扉を探しをり

亀係の亀洗ひゐる梅雨晴問

面談の一对の椅子走り梅雨

捕虫網持ち探検隊結成す

野線のなきまま四十著莪の花

六月の花嫁も乗せさつば舟

ロツカーの小さき鍵穴梅雨兆す

一缶のビールに夫の語りかな

万緑や一直線に雨の降り

青梅の一粒ごとに顔かたち

夏椿喪中の叔母を誘ひ出す 川崎 山本 浪子

梅雨寒や喪服に残る畳皺

いさぎよく散るも叶はず花菖蒲

物想ふ夜はががんぼを友として

ががんぼのたてる翹音の不器用に

音楽家百人のレリーフ薔薇咲けり

風薫るモスクに「いやしの水」の噴く

黒南風の列柱白きモスクかな

夏帽子岬にひとりバスを降り

振りむける少女の髪に蛍かな

滴りの果ては瀧江や二胡の声

地底湖に完き闇や滴れる

キヤラメルに入れ歯取られし梅雨入りかな

手ずれせし青年歌集紙魚走る

社家の橋渡る木沓やかきつばた

川崎 森田 節子

東京 奥田 弦鬼